国立国語研究所学術情報リポジトリ

言語地理学のために：ヨーロッパの方言研究を中心に構造言語地理学の流れをたどる

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-02-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高田, 誠, TAKADA, Makoto
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001767

言語地理学のために

——ヨーロッパの方言研究を中心に構造言語地理学の流れをたどる——

高田　誠

0. N. S. Trubetzkoy から U. Weinreich へ
1. A. Martinet のプラーグ学派的通時音韻論と W. Moulton の構造言語地理学
2. J. Goossens による方法論の体系化の試み
3. 言語地理学の新しい方法論へ

0.

N. S. Trubetzkoy が言語地理学的分布，とくに音韻の分布について音韻体系間の比較という構造的な見方をとる必要があると主張したのは1931年のことであった。"Phonologie und Sprachgeographie" と題する小論文[1]の中で，彼は，相異なる二つの方言のあいだに生じた音の違いについて，つぎにまとめるような分類を試みている[2]。

- phonologische Dialektunterschiede
  - Inventarunterschiede　：一方の方言にある音韻が他方の方言には見られない場合。
  - Funktionsunterschiede　：一方の音韻体系内である位置を占める音韻が，他の方言では別な位置を占め，両者の音韻論的機能が異なる場合。
- phonetische Dialektunterschiede
  - absolute Unterschiede　：音韻論的には同じで，現われる音声にちがいのあるもののうち，すべての音環境でその相違の見られる場合。
  - beschränkte Unterschiede　：同じく，ある限られた環境でのみ違いが生じる場合。

・etymologische Dialektunterschiede

・kompensatorische Unterschiede ：歴史的，語源的に同じ源に発しているある音韻が，両方の音韻体系内での位置を異にする場合のうち，一方の方言での音韻の果たす機能的な役割を他の方言でははは二つ（あるいはそれ以上）の音韻が果している場合。

・freie Unterschiede ：同じく，そのもとの音韻が，両方言で全く異なる音韻になって現われ，両者の間で，機能的に何の関係もない場合。

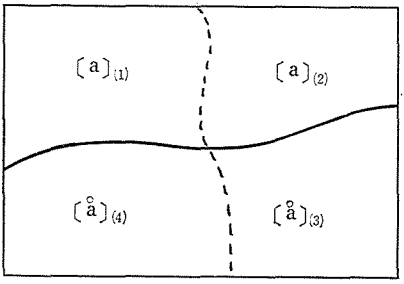
方言間の音の相違についてこのような分類をし，言語地理学に対してプラーグ学派の音韻論の立場から論じたあと，Trubetzkoy は最後に，"Eine vergleichende phonologisch-geographische Beschreibung der Sprachen des Erdkreises steht jetzt auf der Tagesordnung."(3) と結んでいる。彼のここで言う "geographisch" というのは，たとえば印欧語族のような，広い範囲に分布する多くの言語を含めた意味での「地理的広がり」のことらしいとしても，言語地理学に対して，体系間の比較という音韻論的，構造的考え方を提唱している点には注目すべきであろう。

0.1

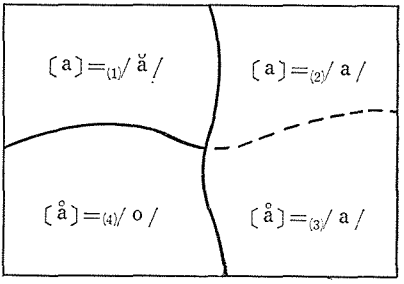
しかし，Trubetzkoy による体系間の比較という考え方は，彼自身が当然のことと考えていたのと相異して，その後約20年間，ほとんど顧みられなかったようである。50年代なかばになって，ようやく，方言間の体系の比較ということを主張する論文が現われ，方言研究の分野に新しい刺激を与えることになるのである。Uriel Weinreich の "Is a structural dialectology possible?" (4) である。体系上の類似点（あるいは相違点）のあるふたつの方言から，その類似点を抽象して，"diasystem" と名付けるさらに高次の体系を構築するというのがこの論文の主旨である(5)。diasystem の設定という考え方は別としても，この論文を支える考え方は，Trubetzkoy の主張した体系間の比較であることに疑はない(6)。彼が，方言学に構造という名を冠し，従来の方言学と構造言語

学とを合体させ，新しい方言学の方法論を創り出すことを試みたことは，文中から察せられる[7]。そして，従来の方言学[8]が体系の比較を怠ったことに対する構造主義者からの批判をつぎのように受けとっている：“…The main objection raised by structuralists against dialectology as usually practiced might be formulated thus: in contrasting 'diasystems' it ignores the structures of the constituent varieties. In other words, existing dialectology usually compares elements belonging to different systems without sufficiently stressing their intimate membership in those systems.”[9]

このような観点のもとに，音声の面での体系的な比較をつぎのような図式的な例を用いて説明している。いま，'man' にあたる語に対して，4人の話者が (1) 〔man〕, (2) 〔man〕, (3) 〔mån〕, (4) 〔mån〕と答えたとしたとき，(1), (2) を同じと考え，(3), (4)を1グループとし，この両グループの間に等語線を引くのが従来の方言学であった。ところが，それぞれの音韻体系を考慮してみて，(1)には母音の長短が音韻論的対立としてあり，(2)にはそれがなかったとすると，(1)は音韻論的には $_{(1)}$/măn/ であり，(2)は $_{(2)}$/man/ となる。また，(3)では，/a/ はmとnとの間では後舌の〔å〕という allophone を持つため(3)は $_{(3)}$/man/ と解釈される。(4)では，〔å〕はすべて /o/ の allophone として実現されるので，(4) は $_{(4)}$/mon/ ということになる。このようにみると，(1), (2)対(3), (4)とグループ分けした場合とは全く異なる，(1)対(2)(3)対(4)という分類がなされることになる。これを図で示せばつぎのようになろう[10]。図Ⅰが従来の方法によるもの，図Ⅱが体系を考慮に入れたものである。



図Ⅰ



図Ⅱ

1.

この論文は具体的な方言を扱ったものではなく，単なる図式的なモデルとして論じられたにすぎないものではあるが，「構造方言学」あるいは「構造言語地理学」として，その後の方言研究に与えた影響は大きなものであった。そして，個々の論文すべてがその影響下にあったとは言えないとしても，体系の比較という観点からの方言研究が50年代後半から数多く現われることになるのである[11]。

それらのうち，スイスドイツ語言語地図 (SDS)[12] をもとに，現代スイスドイツ語の母音体系の地理的分布を扱った，W. G. Moulton の一連の論文[13]はとくに注目される。これらの論文は，"structural dialectology" という新分野を築くこと，とくに，言語地理学的分布の扱いに当たって，構造言語学の作業仮説を実際に適用することを始めから意図したものであった[14]。

1.1

SDS には，中高地ドイツ語 (MHD) の各音韻にあたる音を含む語が多く採られている。Moulton はそのうちから母音を問題にし，各地点の母音体系の分布と MHD の母音体系とを比較し，その変遷の過程を説明していくのであるが，そのさい，いくつかの注目すべき観点，仮説が打ち出されている。それらのうちのいくつかを具体例を追いながら拾い出してみよう。

1.1.1., geographical complementation

MHD の四つの前舌母音，i, e, ë, ä のうち，まず，e, ë, ä をとりあげて，SDS からそれぞれにあたる音を持つと考えられる語群をとり出す。MHD の e については Vetter (Bett, Beck, …) グループ，ë については，Wetter (Speck, fest, …) グループ，ä については Wespe (Pächter, Bäsi, …) グループの3グループである。これら3グループの分布を各地点ごとに重ねると[15]，スイスドイツ語地域の西部は，Vetter－Wetter－Wespe＝/ɛ/－/æ/－/æ/となり，中央チューリッヒ地域では，/e/－/æ/－/æ/。北部では，/e/－/ɛ/－/ɛ/，東部では /e/－ɛ/－/æ/ という現象を呈する。ここで，西部と中央部とを比較してみると，Wetter, Wespe についてはともに /æ/ で共通していて，Vetter だけ /ɛ/ と /e/ で異なっている。言いかえれば，西部の /ɛ/ と中央

の /e/ とは構造的に同じ位置を占め，それぞれの体系の中で同じ機能をはたしていると言うことができる。そこで，この /ɛ/ と /e/ とを抽象し，/E/ という音韻を考えると，西部と中央部の体系から，/E/－/æ/－/æ/ という一種の diasystem が抽象され，/e/ と /ɛ/ とは /E/ の中で相補う関係にあることになる。さらに，重要な点として，この /e/ と /ɛ/ とは「地理的」に相補う分布を呈している点をあげ，これを，Moulton は，“geograpbical complementation” として，音韻体系の地理的分布を構造的にみるときの目安のひとつとしてとりあげている[16]。

さらに，後舌，円唇の各母音も加えた，上記各地域の短母音体系を抽出している (Moulton 1960, 175)。細部を省略してそれらを示すとつぎの表 I のようになる。左端のものは MHD の体系である。

表 I

MHD	西部	西部·中央diasystem	中央	北部	東部
i ü u	i ü u	i ü u	i ü u	i ü u	i ü u
e ö o	ɛ ɔ̈ ɔ	E Ö O	e ö o	e ö o ɛ ɔ̈ ɔ	e ö o ɛ ɔ̈ ɔ
ë ( )					
ä a	æ̈ a	æ a	æ a	a	æ a

/O/, /Ö/ についても上の /E/ の場合と同様に，西部の /ɔ, ɔ/と中央の /o, ö/ とは geographical complementation を呈していると考えられ /O, Ö/ と抽象しうる。したがって，西部と中央の両体系は上のような diasystem で表わされる。

1.1.2 cases vides

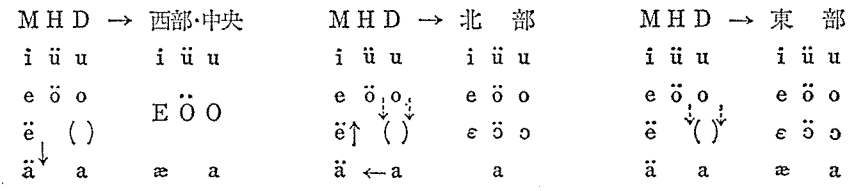
MHD からこれらのいくつかの体系への変化，あるいは，MHD の長母音体系からの変化 (Moulton 1961a) 等を説明するために，A. Martinet の，“*Économie des changements phonétiques*”[17] のなかからいくつかの音韻論的仮説が採用されている。中心的なもののうちのひとつ “cases vides” について述べておこう。

音韻は知的意味を区別しうる最小の単位としての音の「対立」の中で存在するものであり，その対立が集まって有機的な張り合い関係からなる体系を作る

わけである[18]。そして，音韻体系が最も効果的にその機能を果たすためには，その張り合い関係が常に整然とした調和を保つことが必要である。したがって，その調和が何らかの原因により破られた場合，言語はその調和を取り戻そうとして体系を変化させる。そこに音韻変化が生じることになるわけである。すなわち，音韻変化は体系全体の変化の中の一部としてとらえられるべきであり，他と無縁な単独の現象としてとらえてはならない。プラーグ学派的通時音韻論をひとことで言えばうえのようになろうか。そのような音韻論的対立からなる調和を破る「欠損部分」のことを Martinet は cases vides[19] と呼んでいる。そして，その cases vides を埋めようとする力，つまり，体系の調和を取り戻そうとする力を "attraction du système"[20] と名付けている。そのうち，となりの音韻が近付きすぎたためにその音韻も動かざるを得ないという変化（A→B C>A→B→C→）を chaîne de propulsion，逆に，一方が離れすぎたためその距離の均衡を保とうと他が動く変化（A B C→>A→B→C→）を chaîne de traction と呼んでいる[21]。

上の表Ⅰに示した MHD の短母音体系の図の中で括弧で示した部分が，その case vide である。つまり，MHD の短母音は i−u，e−ö，ä−a と前舌後舌の対立を持つのに対して，ë（実際の音価は〔ɛ〕のあたり）の高さのものだけに相手のɔが欠けていて，体系の中で「あき間」を作っていたと考えられる。表Ⅰに示した現代スイスドイツ語諸方言の成り立ちを，このMHDの「あき間」を埋める過程でその方法にいくつかの変種があった結果として説明するわけである。その過程を図で示すと表Ⅱのようになる。実線の矢印は音韻の統合あるいは移動の方向を，点線の矢印はその音韻がふたつに分かれる分化の方向を示す。

表 II



西部・中央地域では，ë が ä に統合され (Vetter－Wetter－Wespe＝/E/－/æ/－/æ/)，三段階の母音体系となった。この際，西部では /i, ü, u/ の系列に長母音系列からの影響で /i, ü, u/≒/ I Ü U/ なる変化が生じ，/e, ö, o/ の系列が /ε, ɔ̈, ɔ/ の系列へ下げられたのに対して，中央では上の変化がそれほど強固でなく /e, ö, o/ はそのままの位置に残った。北部では，MHD の ä が ë に統合され，(Vetter－Wetter－Wespe＝/e/－/ε/－/ε/)，東部では ë と ä との区別は保たれている。この両地域ではこれら前舌母音には「あき間」を埋める働きはなく，後舌母音が変化して体系の調和を回復している。すなわち MHD の ö, o が，ふたつの系列，ö, o/ɔ̈, ɔ に分化し，e, ε との対立を形成するようになった。この地域での MHD の ö, o の分化には，長母音体系の変化も影響を与えている。すなわち，この地域では MHD の û, ô, â という三段階の後舌長母音が，/ū, ō, ɔ̄, ā/ という四段階のものに変化したため，長短という対立の上から /ɔ̄/ に対応する /ɔ/ が生じる心要が生じたということである[24]。

1.2

以上は非常に大まかな紹介であって，細部にわたった事実，およびその解釈，あるいは，それらとドイツ語史との関連等を十分に説明しなければ，Moulton の論旨を正確に紹介したとすることはできないのであろうが，これらの論文全体をとおして受ける印象を言えば，言語変化の要因を言語の体系内に求めようとする点である。とくに，「内的要因」という表現を題に入れた，"Lautwandel durch innere Kausalität…" (Moulton 1961 a) の中でその点を主張した発言が多く見られる。234ページでは，"Wie läßt sich die…Spaltung des mhd. o erklären? Da sie, als Phonemspaltung, ihrem Wesen nach eine strukturelle Erscheinung ist, sind wir wohl berechtigt, bei der Suche nach einer Erklärung auch strukturelle Forschungsmethoden anzuwenden. Es ist ein Grundsatz der strukturellen Lautlehre, daß ein Phonem kein isolierter Laut sondern ein Glied innerhalb eines Systems von lautlichen Oppositionen ist.……" と，音韻を弁別的対立からなる体系内の一員としてとらえるべきことを述べ，その音韻の変化について，つづいて，"Der Hauptgrundsatz

der historischen Phonologie dürfte wohl etwa so formuliert werden : …; folglich kann auch seine (その音韻の) historische Entwicklung nur im Rahmen der Entwicklung des ganzen Systems verstanden werden.…" と，体系全体の変化の中でのみとらえられるとしている。そして，体系の「あき間」を埋めようとする力について，242ページで，"Zu einer Behebung der Asymmetrie dieser Systeme gelangen wir nur durch Besetzung des leeren /ǫ/ Faches. Wir wissen, daß gerade im Gebiet der Lösung C und D (上記表IIの北部，東部にあたる) ein solches /ǫ/ durch Spaltung des mhd. o entstanden ist. Wir wagen also zu behaupten, daß diese Spaltung durch innere Kausalität, durch internen strukturellen Druck, durch den Sog des leeren Faches hervorgerufen wurde." といい，1.1.2 で例示した音韻変化の要因を "innere Kausalität," あるいは，"interner struktureller Druck," さらには，"der Sog[33] des leeren Faches" としてとらえ，体系の「あき間」を埋める力を音韻変化の重要な原因として強調している。

1.3

このような，音韻変化の要因をその体系が音韻論調和を保とうとする力に求め，個々の変化を体系全体の変化の中の一部としてとらえようとする考え方は，まさに，プラーグ学派的音韻の発展としての通時音韻論のそれであり，前述の A. Martinet の "*Économie*…"，がそのモデル理論とすれば，Moulton のこれら一連の論文はそれの言語地理学への応用とみなすことができよう。

一方，これらの論文の主張するところは，音韻変化の内的要因に偏りすぎたきらいがあり，全体をとおして，「言語の地理的な拡がり」という要素に対する配慮に乏しい印象がある。ところどころには多少の言及があるとしても，たとえば，上に例示した，西部，中央，北部，東部等の地理的分布のちがいを，地理的要因，言いかえれば，言語外の要因からする見方も示してほしい気がする。上の四地域への分化は，MHD からの内的変化として説明されれば，たしかに納得はいくが，それではなぜそれらの変化が上記の四地域へ拡がらなければならなかったか。その要因は何か。そこの説明があってこそ，はじめて，言語地理学と言えるのではないだろうか。少なくとも，そこを説明しようとす

る姿勢は「言語地理学」として持ちたいものである。さらに言えば，言語の体系内に求めた要因からの説明と，地理的拡がりという言語外の要因（その地理的拡がりを生じせしめた要因には，もとにもどって，言語内の要因も働らいているわけであるが）からの説明とが相俟って，はじめて，言語の地理的拡がりという現象の真の説明へと近付くことができるのであろう。

2.

言語地理学における構造主義的な考えの流れを追ううえで，最近のものとして最後にあげるべきは，Moulton の一連の構造言語地理学的研究に続くかたちで1969年に著わされた; Jan Goossens の "*Strukturelle Sprachgeographie*"[24] である。この著書は，副題に "Eine Einführung in Methodik und Ergebnisse" とあるように，構造言語地理学の方法論と研究成果とを総括的に論じたもので，この分野で一冊の本としてまとめられた最初のものである。

Goossens はその「序章」のなかで，言語地理学の方向，あるいは歴史を50年代の半ばを境に二つの時期に分け，前期のものを，"……die Dialektgeographie hauptsächlich extralinguistisch orientiert."[25] とし，おもに「言語外」の諸要素に関心を持っていた考え方とし，50年代からのちの考え方では，"……werden Karten intern-linguistisch interpretiert."[26] とし，「言語内」の要素を強調した考え方，言いかえれば，構造言語地理学的な考え方としている。そして，全体を「音韻」と「語彙」の2章に分け，構造的方法で論じた論文を総合，整理し，構造言語地理学の方法論の体系化を試みている。「音韻」の章では，主として，上にあげた Moulton のものをとりあげ，音韻体系に対する音韻論的な見方の違いによる分布地図の描き方のちがいを論じ，言語地理学の一般的方法論に寄与しうる構造言語地理学のいくつかの作業仮説をとりあげて説明し，さらに，それらと共時的音韻，通時的音韻論とのかかわりについて論じている。とくに，A. Martinet の "*Économie des changements phonétiques*" のなかの通時音韻論的仮説と，Moulton の言う "innere Kausalität" とを中心に，構造言語地理学の通時音韻論への寄与を説いた，"(Ergebnisse) für die diachronische Sprachwissenschaft" の項[27] では，「内的要因」，とくに，「体系のあき間」を埋めようとする力によって「ひき起こされる」体系の変化と，

体系の調和を保つべく働く力によって，逆に，音韻の変化が「押えられる」場合とのふたつが論じられ，Moulton の論文では，「内的要因」が積極的に働いた場合しか論じられていないのに対して，通時音韻論の総括として注目すべきものがある。

2.1

これまで追ってきた言語地理学における構造主義的な考え方の流れは，すべて，音韻論の分野に限られている。現在までのところ，それ以外の，形態論，シンタックス，語彙の分野では，きわだった流れは見られないと言わざるをえない。語彙の言語地理学の世界では，従来の言語地理学でも，同義語，同音語，多義語等の概念を用い，語の変化を説明してきたわけであり，ある意味では，「構造的」な扱いをしてきたと言えよう。しかし，それらは，いわば，個別的であり，全体を通じて一貫した「方法論」にまで体系付けられたものとは言いがたい。Goossens も上記の著書のなかで「語彙」の章をもうけ，著者自身の論文[28] を多く引用し，S. Ullmann の方法[29] を採用し，語彙の構造言語地理学として体系付けようとしている。しかし，個々の事実，分布の取扱いについては興味深いものが少なくないが，全体的な方法論の体系化，とりわけ，いうなれば「語彙体系の変化の内的要因（それがあるとして）」の一般化という点については，十分に成功しているとは言えないという印象を得た。

このことは，構造主義言語学がその理論を十分に展開した分野が音韻論の分野に限られ，その他の分野，なかんずく，語彙論，意味論の分野での方法論の体系化がまだ十分に発展していないことと決して無縁ではかろう。言語地理学はこれらの分野の発展を待っている，あるいは，逆に，言語地理学的研究が，これらの分野の今後の発展に寄与する点が少なからずあると考えるべきであろう。

2.1.1

形態論およびシンタックスの分野での構造言語地理学的な研究については，Goossens は全く「お手あげ」といった状態[30] で，上記の著の中では章さえ設けていない。

しかし，Stiefkind かもしれないが，形態論の分野で，いままで見られるか

ぎり，わずかに2編の小論文が著わされている。ひとつは，M. Shrier の "Case Systems in German Dialects"[61] である。ドイツ語方言の格体系を扱ったもので，男・女・中の各性の定冠詞，不定冠詞，人称代名詞，および，形容詞強変化語尾の格体系を，主格（N），対格（A），与格（D）の3格（属格は方言の世界ではほとんど消滅してしまい，句表現に変化していることが多く，ここでは取扱わなわったということである）の区別がどうなっているかという観点から分類したものである。つまり，N，A，D がN/AD，NA/D，N/A/D，NAD と区別される様子を分布地図に表わし，それらの区別のされ方が，各冠詞，代名詞等の別により，また，各性の別により様々に変わる様子が示され，それらを重ね合わせることによる方言の区画が試みられている。ただし，資料を言語地図からでなく，各地方言を記述した論文から得ているため，地点数が非常に少ない点が残念である。

いまひとつは，オランダ語動詞の現在形の語尾変化を材料にした，R. Sayre の "The Present Tense Inflections of the Dutch Dialects."[62] である。各人称の単複両形とていねい形の七つの文法的カテゴリーと，これをうめるいくつかの変化語尾との関係を扱ったもので，ある語尾が地域によって別のカテゴリーを埋め，それらが交錯しつつさまざまな「体系」を作りだす様子が地図の上に示されている。作図の方法に興味ある点も見られるが，体系を抽象し，それらの間での異同の判別に力点が置かれ，一種の区画論に終ってしまい，それらの通時的な変化に対する説明が試みられていないのが残念である。

以上，ふたつの論文は見られたが，方法論としては，いまだ確立しているとは言えない。

3.

以上，言語地理学の新しい流れとしての構造言語地理学を，音韻地理学を中心に追ってきたが，最後に，従来の言語地理学と構造言語地理学との関係についての，Goossens の，当然であるが，しかし注目すべき見解を引いて拙文の結びとしたい。すなわち，それら両者は，決して相容れないものではなく，構造言語地理学は，言語内の要因を強調することによって，従来の言語地理学を強化，充実しようとするものであるとするとらえかたである[63]。筆者が 1.3. で

述べたある種の不満と，この Goossens の発言は，相通ずるところのあるものであろうかと思われる。従来の言語地理学は個々の方言的事実に目をうばわれて，それらを言語体系内の一員とする見方を忘れていたという指摘を否定することはできないであろうし，一方，いわゆる構造主義が，体系の中にある構造の抽出というきわめて抽象的形而上学的な議論に重きをおき，言語が言語外のきまざまな要因からも大きく影響を受けるものであるという点を，ややもすれば見失いがちであるということも，また，人のよく言うところである。それぞれに言い分のある議論というものは，両者が対決し，どちらか一方が相手を「打ちのめす」というかたちでは，決して実りある発展は望めない。いわゆる「従来の」言語地理学と，新しい構造言語地理学とが，互いの欠けた部分を補いあってこそ，はじめて，真の「言語地理学」の方法論が確立されると考えるべきであろう。

注

(1) TCLP (*Travaux du Cercle Linguistique de Prague*) 4, Prague, 1931. 228—234 (*Principes de Phonologie*, にも再録)

(2) ibid., 228—229

(3) ibid., 234

(4) *Word* 10, 1954, 338—400

(5) ibid., 389—390. "Structural linguistic theory now needs procedures for constructing systems of a higher level out of the discrete and homogeneous systems that are derived from description and that represent each a unique formal organization of the substance of expression and content. Let us dub these constructions 'diasystems,'……"

(6) ibid., 388. 脚注に，"Some of the phonological points made here were inspired by N. S. Troubetzkoy's article on linguistic geography, 'Phonologie et géographie linguistique', TCLP 4……" とある。

(7) ibid., 388. "The controversy could be resolved only if the structuralists as well as the dialectologists found a reasoned place for the other discipline in their theory of language. But for the disciplines to legi-

timate each other is tantamount to establishing a unified theory of language on which both of them could operate. This has not yet been done. ……The present article is designed to suggest a few of the difficulties which should be ironed out if the theories of two very much disunited varieties of linguistics, structural and dialectological, are to be brought closer together.……"

(8) 「従来の方言学」についてここで詳しく述べることはしないが，研究全体を概括したものとして，つぎのようなものが参考になる。

Iorgu Iordan : "*An Introduction to Romance Linguistics, its Schools and Scholars,*" Oxford, 1970[2] (原著："*Introducere in Studiul Limbilor Romanice,*" Iaşi-1932. を John Orr が1937年に翻訳し，さらに1970年に Rebecca Possner が補注を加えて出版したもの)，とくに，第3章，「言語地理学」が参考になる。

Gerhard Rohlfs : "*Romanische Sprachgeographie, Geschite und Grundlagen, Aspekte und Probleme mit dem Versuch eines Sprachatlas der romanischen Sprachen,*" München, 1971.

V. M. Schirmunski : "*Deutsche Mundartkunde, Vergleichende Laut- und Formenlehre der deutschen Mundarten,*" Berlin, 1962. (初版は，モスクワ，1956)，うち，Teil I, "die deutsche Mundartforschung" に教えられることが多い。

M. Durrell, M. Karaś,

B. Kratz, W. Veith. : "*Sprachatlanten, Berichte über sprachgeographische Forschungen* I," Beihefte Neue Folge Nr. 8 der *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik*, Wiesbaden, 1969.

(9) op cit., 391.

(10) ibid. 392—393. 原図は 393 に示されている。

(11) しかし，多くはいくつかの方言の音韻体系の構造的記述とその比較という観点のもので，言語地理学的なものはわずかしか見られない。例をあげよう。

K. Heeroma, : "De ostnederlandse Langevocalensystemen," *Structuurgeografie*, Amsterdam, 1961. 1—15,

東部オランダ語方言の長母音体系を地図の上に示したもので，三角形符号を巧みに用いて体系を視覚的に示した点が注目される。

L. Heilman : "Per una dialettologia strutturale," *Communications et Rapports du Premier Congrès International de Dialectologie Générale*, I, (1960), Louvain, 1965. 94—103,

北部イタリア方言を材料にして構造的な比較を試みている。あとに述べる A. Martinet の「体系のあき間」という考え方をとりいれている点と，他の諸論文とはちがい子音を扱っている点が注目される。

J. Goossens : "*Die niederländische Strukturgeographie und die 'Reeks Nederlandse Dialectatlassen'*, Amsterdam, 1965.

"*Reeks Nederlandse Dialectatlassen*" は，E. Blancquaert, W. Pée などが行なった，オランダ語の方言の地域別の言語地図を集めたもので，グロータース神父の父君 L. Grootaers のものも含まれている。これらの複数の言語地図集を基に，オランダ語の母音の体系的比較を行なった点に興味が持たれる。

(12) Heinrich Baumgartner, Rudolf Hotzenköcherle : "*Sprachatlas der deutschen Schweiz*," Vol. I, Bern, 1962 ～

(13) William G. Moulton : "The short vowel systems of northern Switzerland," *Word* 16, 155—182, 1960.

—— : "Lautwandel durch innere Kausalität : die ostschweizerische Vokalspaltung," *Zeitschrift für Mundartforschung*, 28. 227—251, 1961 a.

—— : "The dialect geography of *hast hat* in Swiss German," *Language* 37, 497—508, 1961 b.

—— : "Dialect geography and the concept of phonological space," *Word* 18, 23—32, 1962.

—— : "Phonologie und Dialekteinteilung," *Sprachleben der Schweiz.*, 75—86, Bern, 1963.

—— : "Phonetische und phonologische Dialektkarten : Beispiele aus dem Schweizerdeutschen," *Communications et Rapports du Premier Congrès International de Dialectologie Générale*, II, (1960), 117—128, Louvain, 1964.

—— : "Die schweizerdeutsche Hiatusdiphthongierung in phonologischer Sicht," *Philologia Deutsch*, 115—129, Bern, 1965.

—— : "Contributions of dialectology to phonological theory," *Paper delivered before the 10 th International Congress of Linguists*, Bucharest, 1967.

—— : "The mapping of phonemic systems" *Verhandlungen des zweiten internationalen Dialektologenkongress* (1965), (Beihefte・Neue Folge Nr. 4 der *Zeitschrift für Mundartforschung*), 574—591, Wiesbaden, 1968 a.

—— : "Structural dialectology," *Language* 44, 451—466, 1968 b.

スイスドイツ語は，スイス東部チューリッヒを中心とする小さな地域に分布するドイツ語の一方言であるが，狭い地域にもかかわらず，多くのバラエティに富んだ方言が分布することと，中高地ドイツ語（MHD）から新高地ドイツ語（NHD）への大きな変化，とくに，neuhochdeutsche Diphthongierung と呼ばれる長母音の二重母音化という変化（e. g. MHD îs, miuse, mûs, >NHD Eis, Mäuse, Maus）をそれほど強く受けていなくて，中高地ドイツ語の特徴も残していることなどから，いわゆる Germanist にとって，興味深い地域になっているということである（Moulton 1968 b. 452)。

(14) Moulton 1968 b., 451, "……Because I had received my training at Yale under such great men as Edward Sapir and Leonard Bloomfield, it was probably inevitable that I should approach the study of dialects from a structuralist point of view.……"

(15) 各地点の音（音韻，音声いずれでも）の示し方におもしろい方法をとっている。3時を指す時計の針のような符号を用い，たての線で〔e〕（あるいは /e/），ななめ（7分30秒を指す長針の位置）の線で〔ε〕を，水平の線で〔æ〕を表わす。そして，上から Vetter グループ，Wetter グループ，Wespe グループの順で示すわけである。すなわち，たて，ななめ，水平に各1本ずつの符号は，Vetter－Wetter－Wespe＝e－ε－æ を示し，たて1本，水平2本の符号は e－æ－æ を示すという具合である（Moulton 1960. 157. の図，Moulton 1961, 499, 501, 506, の図等参照）。

(16) Moulton 1960, 177.

(17) Andé Martinet : "*Économie des changements phonétiques, Traité de phonologie diachronique*," Berne, 1955.

プラーグ学派本来（TCLP の時代とでも言おうか）の音韻論には，Trubetzkoy の "*Grundzüge der Phonologie*" TCLP 8, に代表されるような，いわゆる共時的な音韻論ばかりでなく，Roman Jakobson の "Remarques sur l'évolution phonologique du russe comparée à celle des autres langues slaves," (TCLP. 2. 1929, "*Roman Jakobson, Selected Writings* I, 7—116 に再録）などのような通時的な音韻論も見られる。この Martinet のものは，副題にもあるように，後者のプラーグ学派的通時音韻論と考えることができよう。示唆に富む著書である。

(18) Trubetzkoy : "*Grundzüge der Phonologie*," 1962[3], 32—33, "……Unter phonologischer Opposition verstehen wir also jeden Schallgegensatz, der in der gegebenen Sprache eine intellektuelle Bedeutung differenzieren kann. Jedes Glied einer solchen Opposition nennen wir phonologische (bezw. distinktive) Einheiten.……"

TCLP 4 : "Project de terminologie phonologique standardisée," 311, "Phonème——Unité phonologique non susceptible d'être dissociée en unités phonologiques plus petites et plus simples."

"Système phonologique——Ensemble d'oppositions phonologiques propres à une langue donnée."

(19) op. cit., 80 (§3.23),「体系のあき間」とでも呼ぶべきか。英語では hole in the pattern. Moulton のドイツ語訳は, Lücke im System, leeres Fach. (Moulton 1961 a, 237)

(20) ibid., 80 (§3.22), 50 (§2.15)

(21) ibid., 59 (§2.28),

(22) Moulton 1961 a, 237, cf. Moulton 1965.

(23) Martinet の chaîne de traction に当たる。注(21)参照。

(24) Jan Goossens : "*Strukturelle Sprachgeographie, Eine Einführung in Methodik und Ergebnisse*, Heidelberg, 1969.

(25) ibid., 14.

(26) ibid.

(27) ibid., 62—68.

(28) J. Goossens : "*Semantische vraagstukken uit de taal van het landbouwbedrijf in Belgisch-Limburg*," Antwerpe, 1963.
ベルギー・リンブルグのオランダ語方言のうち，農業に関する語彙を扱ったもので，各所に体系的に扱おうとする姿勢がうかがえる。

(29) Stephen Ullmann : "*The Principles of Semantics*," Oxford, 1957[2].
—— : "Discriptive Semantics and Linguistic Theory," *Word* 9, 225—240, 1953.

(30) op. cit., 24, "Ein Handbuch der strukturellen Sprachgeographie sollte die neuen dialektologischen Methoden für alle Aspekte der Sprachsysteme behadeln, daß heißt für die Phonologie, die Morphologie und Syntax, die Lexik. Aus praktischen Gründen müssen wir jedoch auf eine Untersuchung der Formen- und Syntaxgeographie verzichten. Die Formenlehre und der Satzbau sind ja immer die Stiefkinder der Dialektgeographie gewesen ; die Studien, die es auf diesen Gebiet gibt, erlauben es beim heutigen Stand der Forschung leider nicht, eine zusammenfassende Übersicht der Ergebnisse und vor allem der Methodik einer strukturellen Syntax- und Formengeographie zu

geben.……"

(31) Martha Shrier : "Case Systems in German Dialects," *Language* 41, 420—438, 1965.

(32) Robert T. Sayre : "The Present Tense Inflections of the Dutch Dialects, A Study in Structural Dialectology," *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik*, 1972. 19—36,

(33) op. cit. (Strukturelle Sprachgeographie), 23, "…In ihrer Darstellung der sprachgeographischen Fakten geht die neuere Methode von strukturellen Prinzipien aus. In ihrer historischen Deutung dieser Fakten verwirft sie (strukturelle Dialektologie) die Prinzipien der extralinguistischen Dialektologie keineswegs, sondern versucht vielmehr, diese zu ergänzen, indem sie viel stärker die Möglichkeit einer inneren Kausalität des Zustandekommens von sprachgeographischen Gegensätzen betont.…"